
狐と少女

寿々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐と少女

【Nコード】

N7194B

【作者名】

寿々

【あらすじ】

山奥の村に奇病に罹った少女がいた。どの医者でもこんな病気は見たことも無い。それもそのはず、だってこれは「蟲師」しか知らない病気なのだから。

第一・蟲師

青々とした森に、小さく光の矢が射し込んでいる。
ちゅん、と鳥が鳴く声。

ざくざくと草地を踏みながら、ひとりの青年がそこを歩いていた。
口に終わりがけた煙草をくわえ、無言で歩く。

がさ、とゆれた木の枝にちよつと反応し、顔をあげた。

「このあたりか？」

答えるように、もう一度鳥が鳴いた。

ちゅんちゅんと二回だけ。

山の麓^{フモト}の、静かな村。

そこに、青年が足を踏み入れた。

ぎよつと顔を顰^{シカ}めた村人に、青年は何事も無いように問うた。

「あのー、すいません。この辺で体が動かせない少女がいるって聞いたんだけど」

村人が、右往左往してごによごによと耳打ちした。

怪訝そうな顔で、青年を睨む。

そしてひとりの少年が出てきて、山奥のちいさな家を指差した。

「あそこ？」

こくんと、無言のままに頷く。

「なんであんなところに行かれるのです？」

何人かの村人が、不安そうに尋ねる。

子供が遠くから、やいやいとはやしたてるのが聞こえた。

「あんなきつたない所に行くんだ！あいつもきつときつたねえんだ！」

肯定する声が聞こえたが、青年は無視した。

（この村の人たちは蟲師を知らないのか）

青年はぼおつと考えて、村人たちの質問には答えず歩き出した。

感じが悪い、と叫ばれたがこれも無視した。

「あの・・・あんたいつたい、何なんだよ？」

さっき教えてくれた少年が駆けてきて、青年の服の裾を引っ張った。面白半分でもないし、からかってるわけでもないと分かったので、青年は小さく屈んで少年を手招きした。

手のひらで耳を隠し、こっそりとその子だけに教える。

「俺は、蟲師。蟲師のギンコ」

少年の顔が、少し希望を持った。

第一・蟲師（後書き）

これは、蟲師のファンフィクションです。

ですがまだ十分に原作を読んでいないため、

「あれ？ここなんか原作に合ってない。これはこうなのに」ってところがあつたら

教えてください。

あまりキツく言われると作者がへこみますので
お手柔らかにお願いします。

第二・狐

まさか、村の向こうにもうひとつ村があるとは。
ギンコは驚いたように目を丸くした。

「此処だよ」

道案内をしてくれた少年は、裸足のまま棘のある草を踏みつけながら、

山奥の小さな村を指差した。

第一印象は、人が居ない。

「そつえば聞いてなかったな」

少年が不思議そうに振り返る。

「お前の名前だよ」

「あ・・俺はシナ。なあギンコ、此処で何するんだ？」

こんな村に来る奴なんかめつたにいない。

「まさか・・・サジを殺すつもりか!？」

「サジ? ああ、あの子ね。殺すつもりはない、蟲を取るだけさ」

むし・・・? とシナが訊いて来た。

ギンコは急斜面を降りながら、蟲と昆虫は違つぞ、一応、とだけ言つた。

シナの案内で、村で一番大きな屋敷に着いた。

屋根の上に、中くらいの狐の象がある。

そして中から出てきた女も、狐の像を持っていた。

「蟲師・・・? きつとサジ様のために呼んだのね。どうぞ、おあがりください」

両手を狐から離さず、女は顎で示した。

ギンコとシナは、何も言わずに中へ入った。

「サジ様は生まれたときから体が動かせなかったんです。」

最初は下半身だけだったのが、どんどん侵食されて。今は顔以外全て動かす事が出来ないのです」

女はギンコを囲炉裏の前に座らせ、手で待つようにと示し、消えた。そのときギンコはシナがないことに気づいたが、ほおっておいた。（蟲の気配がする。「イナリ」か？）

首を回して、ぐるりとあたりを見回してみた。

首元に赤い布をつけ、提灯チヨウチンを持った狐が何匹も飾られてある。

どれも細い目で、ギンコを睨みつけていた。

（こんだけ多いと居心地わるいな）

顔を囲炉裏に向け、今にもはねそうな赤い火にそつと手をかざした。

ギンコの手がほんのり温かくなつたあたりで、目つきの悪い老婆が、何も言わずに入ってきた。

先ほどの女と同じように、手に狐を持って。

「どうも、蟲師のギンコです」

ふん、と鼻で笑って、老婆は座布団に腰を下ろした。

「サジの病気を治してくれるのかい？」

「ええ、場合によりますけどね」

冷たく返事をしておいた。

煙管キセルの中に入っていた灰をたたき出し、老婆はにたりと笑った。

口から灰色の煙が出される。

「聞いたことも無いやつらに孫を任せるのは心配だがね」

こいつら、本当に蟲師を知らないのか、と

ギンコは薄く顔をゆがめた。

「じゃ、サジのところに案内させる」

それだけを言い残して、老婆は去った。

老婆の入れ替わりで、今度はシナが入ってきた。

「ギンコ、あのババアに何か言われたか？」

「べつに？」

二つ返事で返しておく。

「ならいいや。あいつ性格悪いんだ」

シナはさつき老婆が出て行ったあたりを見て、ちつと舌を鳴らした。そしてギンコの手を引き、部屋から出た。

「お前、何処にいるか分かるのか？」

「サジは、友達だったから。よくしってるよ」

鶴と亀が描かれた金箔が貼り付けられている部屋の前でシナは立ち止まった。

何も言わずにそつと襖をあける。

漆黒の髪をした少女が、布団に横たわっていた。

第三・サジ

冷たい瞳だった。

天井を睨みつけていたサジは、くるりと頭を四分の一回転させ、ギンコとシナがいるほうへ向いた。

「シナ・・・新しい医者か？」

「違うよ！ギンコっていう『蟲師』だ」

蟲師。

聞きなれないその言葉に、サジは顔をしかめた。

ギンコは前触れもなく断りもなく、サジの掛け布団を取り払った。

「おい！なにをするッ！？」

「足を診るだけ」

その言葉に、びくつと肩を震わせる。

サジの足はどす黒く染まっていて、青あざがたくさんあった。女の子らしく華奢な足は、腐っているようにも見えてしまう。折り曲げたら折れてしまいそうだ。

「サジ、この村では狐を信仰してんのか？」

なれなれしい、とサジは小さく呟いたが、一応頷いた。

この村では、狐に対する信仰が篤い。

サジも、首から狐の体に穴を開けて紐を通したものを吊ってあった。

「昔、この村がまだ海に面していたとき、狐が降りてきて、当時噂されていた狸子を山へ帰したんだ。そいつらは村を荒らしまくってたからね」

「狸子？」

「狸が子供に化けてる事」

ふうん、とギンコは適当に返事した。

「それかららしいよ。ずっと狐は守り神なの」

まるでよそ者のような言い方に、ギンコは訝しげな顔をした。

「もう足は診たでしょ。布団返してよ」

無言で布団を被せ、ギンコは自分が背負っていたものから、小さな狐を出して見せた。

「昔、このあたりで貰ったものを押し付けられたんだが」
サジが持っているものと比較する。
そっくりそのままだ。

「・・・ギンコ、サジは疲れてるみたいだ。帰ろう」
シナが、ギンコの腕をちゃんと引つ張った。

どうせこの村にいても飯はもらえそうに無い。
そう悟ったギンコは、シナの言うとおりいったん山を下りることにした。

「ギンコ、サジの病気は治せんのか？」

「ああ、あいつの体力がもてばの話だがな」

あいつは、狐にとりつかれている。

ただの狐じゃない。

イナリという蟲だ。

狐は別名が稲荷、たぶん由来はそこだ。

形はただの狐だが人にとりついたら厄介だ。

まず足から腐らせて、魂も体も自分のものにしてしまう。

サジの体は、あと長くて半年だ。

第四・病氣

シナは絶句した。

あと半年の余生だなんて。

まだ、若いのに。

けれどあいつは、何も体験していない。

楽しい事も面白い事も。

なにひとつ、布団の中から眺めているだけだったのだ。

「ギンコ・・・サジ、死んじゃうの？」

ギンコは何も言わなかった。

「また来たのか」

次の日の朝、ギンコたちはサジの家に来た、が

ふい、と顔をそらしてしまうサジ。

苦笑いするギンコ。

何も言わず心配そうにふたりの顔を見比べるシナ。

「サ・サジ。もしかしたら病氣が治るかもしれないんだぜ？」

「もしかしたら、病氣が治らないのかも」

サジの冷たい声が響く。

図星をつかれたシナは何も言い返せなかった。

「もういいさ。この体も慣れた。此処から柿木カキノキを見るだけでもいい」

「柿木に登ってみたくはねえのか？」

サジは二の句が告げなかった。

もう少し手を伸ばせば届く柿木に、何度登ってみたいと思っただろう。

遠くから聞こえる子供の声を、何度羨ましいと思っただろう。

しかし、この手も足も全て動かせないのでは話にならない。

「な、登ってみたいだろ？」

ずきん、と心に突き刺さる。

ほんと村の子供がやってるおはじきだって、まりつきだって、鬼事だって、

体が動くのなら、やってみたかった。

「お前の体を支配してる蟲を取る。このままじゃ体力がもたんから今から寝とけ。」

明日すつからな。ちゃんと寝とくんぞ」

何もいえないサジに背を向け、ギンコは襖を閉じて出て行つた。

「な、サジ。明日、頑張ろうぜ。治ったらさ、俺と柿木登ってさ、生つてる柿全部食おう」

ぽんぽんと二回ほどサジの布団を叩いてから、シナも部屋を出た。部屋には、嗚咽をこらえて泣くサジが、残された。

木でできた廊下は、歩くだけで悲鳴を上げる。

そこら中に狐が舞っているのが見える。

ふう、と煙草の煙を吐き出すと、それが巻きつき狐は消えた。

（この家だけに憑いている。厄介だな）

じつと狐を見つめていると、反対側から老婆が歩いてきた。

慌てて煙草の火を消す。

ちらりとギンコを一瞥しただけで何も言わず、老婆は去つた。

そういえばシナは何処へ行つた？

くるりと後ろを振り返ると、手を振りながら小走りに駆けてくるシナがいた。

それにつられてギンコも手を振る。

しかし、老婆がシナの隣をすり抜けたとき、

シナの笑みが固まつた。

老婆を見て、老婆が笑つた。

そして何もいえずに、シナは帰ってきた。

「どうした？シナ」

困つたような、驚いたような顔でギンコを見上げる。

「あの・・・あのババアが・・・」

サジの病気を治すのは、許さないよ………っ
て」

ギンコは、訝しげに顔をゆがめた。

第五・憑く

ほんとうに、治るのかな。

治ったら、シナと一緒に走り回ってみたい。

山のずつと奥まで行って、栗の実を採ってみたい。

いままで冷たく当たってしまったギンコに、詫びと礼を言わなければ。

サジの顔が笑った。久しぶりの事だった。

「おいばあさん。あいつはこのままだと死ぬんだぜ？」

シナの言葉に驚いたギンコは、くるりと踵を返して老婆へとかけた。その後を、恐る恐るシナが追いかける。

「それに依頼したのはあんただろ」

「私はしていない。この婆さんがしたんだ」

そのとき、ギンコはようやく気がついた。

これは先ほどの老婆ではない。

蟲に憑かれている老婆だ。

「この婆さんの魂は？」

くつくつと嫌な笑みを浮かべた。

「食ってる途中。腐りかけてたから全然美味しくないけどね」

魂を、食う。

そんなわけの分からない言葉に、シナは混乱してきた。

手に持っていた煙管を落とし、踏みつける。

「蟲師、ギンコと言ったか。いますぐ山を下りろ。さもないと私の同胞が貴様を食い殺すぞ」

ひつと悲鳴をあげたシナは、ギンコの影に隠れた。

しかしギンコは、恐ろしく思うどころか、口の端をゆがめて笑った。
「口だけは達者なようだな。しかしなあ、お前達の力は俺には到底

及ばないわけなんだな」

そして老婆の頭をぐいとひっぱると、首の後ろを叩いた。

ぎゃん、と獣が鳴くような声がして、老婆から意識が無くなった。

「魂を食ってしまう前なら、こいつらも大した力は無しさ」

「じゃ・・・サジは？」

「引き剥がすのは簡単だが、サジの体力が持たんな。この婆さんだつて、かろうじて生きてるくらいだよ」

シナは、不安そうにギンコを見上げた。

「大丈夫だつて、成功するさ」

幸い女中は皆憑かれておらず、ギンコはサジの体を治す事を最優先事項とした。

（あとで塩でもまいときやいいんじゃないねーの）

この家のことはひとまず置き、サジを手がける。

普通の子供の幸せを、味わえるように。

「じゃあ、はじめるぞ」

第六・イナリ

動けない少女の体をゆっくりと抱き起こす。
起きたのなんて多分初めてだ。

視界が大きく広がり、景色が増えた。

とたんに、激痛が走る。

「あぐっ・・・！」

なにしろ十何年も動かしていない体だ。

筋肉や骨があちらこちらとくつついて、おかしい体になっている。

「我慢しろ」

ギンコは少女の首の後ろに痣があるのを見た。

痣に見えたが、よくみたら痣じゃない。

穴だ。

中で何か蠢いている。

「こりやますます厄介だな・・・」

イナリには、外で一時的に憑くタイプと、中で寄生するタイプがある。

見るのは初めてだから、当然触れるのも初めて。

仕方が無いから、サジを寝かせて掻き出すことにした。

後頭部に打撃を食らわす。

「う　ッ!？」

一瞬にして、サジは意識を飛ばした。

「サジ!？」

「死んだわけじゃねえから安心しろ」

いきなり倒れられたのに、安心できるかッ。

シナは心の奥底で、そう叫んだ。

「さて・・・」

穴に指をあてがう。

中のが驚いて、奥に逃げようとするが骨が邪魔して無理だった。

ギンコの細くて長い指がするすると追いかけて、端を掴んだ。
ぬめりはなかった。

フサフサとした毛の感触。
それを一気に引き抜いた。

「うわっ！」

そして瓶に押し込む。

中で喚いているのは、何処からどう見ても狐だった。

若干、小さいが。

「すげえ・・・」

イナリが入っている瓶をじろじろと眺めて、シナは面白そうに呟いた。

サジの首の穴がぎゅるぎゅると音を立てて閉まっていく。
元通りの、普通の首に戻った。

「俺の仕事は、終わったな」

ギンコは、イナリが入った瓶を持って、立ち上がった。

第七・狸子

「お・・・おい！サジはどーすんだよ！？」

シナが追いかけてきて、ギンコの服の裾を引っ張った。
はじめて逢ったときのシナの印象が蘇ってくる。

「そのうち起きるって」

煙草をくわえ、呆然とするシナを放ってギンコは家から出て行った。

「なんだ・・・あいつ。無責任な奴」

ちえつと小さな舌打ちをして、シナはサジが眠っている部屋に戻った。

誰もいない家。

そつえば、この家の住人はどうなってしまったのだろうか？

ギンコは森の中に入っていた。

がさがさと怪しげにうごめく木々は、ギンコを完全否定している。

とたんに、頭上の木が鳴り上から松ぼっくりが落ちてきた。

「痛・・・」

どこから？と見上げてみる。

狸と狐が交じり合ったような面を被った少年が二人いた。

「お前らか？あの家の住人を喰ったのは」

言葉になっていない言葉で、少年達が叫び、喚く。

「狸子つつー蟲の名前は聞いたことあんだよなあ」

ふう・・・と煙草から吸った煙を大氣中に吐き出した。

それらはすぐに狸子に巻きつく。

「ぎきききぎぎ！」

なにやらおかしい言葉をうめきながら、狸子が落ちてきた。
煙が晴れる。

「ちよつとごめんよ」

被っていた面を剥いで見る。

その面は、ぼんと音を立てやがて小さな泡になった。

「カエセ・・・オレラノ・・・カエセ・・・メンカエセ・・・」

低くうめいたそれは、もう少年ではなかった。

何かよく分らない。

たとえば、ドロドロとした生ゴミのようなもの。

狸子の正体は狸・・・ではなく力の弱い蟲だった。

それを瓶に押し込む。

「まあ、此処で我慢してくれな」

イナリが入っている瓶の中に狸子を押し込んだ。

中でふたつの蟲が争っているのが見える。

「犬猿の仲か・・・でもこうするのが一番だからな」

ギンコは自分が行った事にしばし苦笑し、里に戻ろうと踵を返した。

「ギンコ！お前何処行ってたんだよ！」

シナから浴びせられた怒声は、これだった。

「サジが起きたのはいいけど・・・あいつ記憶障害があるぞ!？」

そんな事推測ずみだ。

そのため山の中に狸子を探しに行ったのだから。

「まあおちつけ」

シナをなだめ、瓶を取り出す。

中は透明な液体だった。

「これを飲ませてみる。苦いが、全部だ」

半信半疑でシナは頷き、

お椀をもってきてそれを流し込んだ。

陽に当たって、キラキラとまぶしく光る。

「サジ・・・」

嫌そうな顔をしながら、サジはそれを口に流し込んだ。
眉根にしわが寄せられる。

「ゴメン、でも全部のんで」

別にシナが悪いわけではないが、謝ってしまった。
全部を喉に通した後、サジは腕をぼとりと落として、倒れてしまった。

「またかよ！」

こう何度も気絶されては見てるほうもひやひやする。
だが、ギンコは薄く笑っていた。

「次おきたとき、たぶん治ってるぜ。たぶんな」

曖昧な言葉に、シナはちょっと不安になった。

第八・お礼

暗いなあ。

どこだろう？

あれ？暗くない？明るいよ・・・。

足元でなにか光ってる。

なんだろう？

それを掬い上げたいという衝動に駆られた。

地面にぺたりと手をつける。

するとそれは、少女を包み込んだ。

悲鳴なんかでない。

ただ、驚いただけ。

でも気持ちよかった。

ふわふわしてて、ゆらゆらしててこのまま何処かに行けそうな。

「んん・・・」

頭がぐらぐらと揺れる。

「サジ！起きたのかッ・・・よかったあ」

シナがサジの布団を代えていた。

どうやら自分は、ずいぶんという間寝ていたらしい。

「婆たちはどこだ？」

サジがか細い声で訊いて来た。

それに答えることは出来なかった。

「……あのさ、サジ。こつちの村に来いよ？」

「なんだ？いきなり……！！！」

手が、動かせる。

足が、思い通りに動かせる。

血が通っている。そんな小さなことまではつきりと分かった。

「わた……私ッ……治った……？」

体が小刻みに震える。

今まで一度も無かった事だ。

「これで……柿木に登れるの……？」

ナミダをため、一生懸命に笑おうとするサジを見るだけで胸が熱くなり

こくこくと何度も頷くしか、シナは出来なかった。

「あ……ギンコは？」

「さあて、次は何処だ？」

ギンコは呟いて、背負っているものから小さく丸めた紙切れを取り出した。

聞いたことも無い地名が記されてある。

「どこだ？こりゃ……化野アダシノにきいてみるしかねえかな」

あきらかに嫌そうな顔をして、ギンコは一步步き出した。

「そつか、ギンコ行っちゃったんだ」

「悪い……引き止めたんだけど」

「うっん。いいよ別に。ただお礼が言いたかったただだから」

どこかで、鳥が鳴いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7194b/>

狐と少女

2010年10月9日17時42分発行